



Title	慰霊・追悼・顕彰の近代：個へのまなざしと歴史意識の生成
Author(s)	矢野, 敬一
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46027
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	矢野 敬一
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19629 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	慰霊・追悼・顕彰の近代一個へのまなざしと歴史意識の生成一
論文審査委員	(主査) 教授 中村 生雄 (副査) 教授 川村 邦光 教授 杉原 達 教授 佐野 賢治

論文内容の要旨

本研究は、近代日本における個（人）が、公的・社会的な場面においてどのように慰霊・追悼され、あるいはまた、どのような顕彰の対象となっていたかを、そのナショナルな政治力学のコンテクストに焦点をあてて考察した歴史一民俗学的研究である。全体は三部に分かれ、九つの章で構成されている。分量的には 400 字詰め原稿用紙に換算して 730 枚ほどで、本文中に若干の写真・参考資料が挿入されている。

従来の民俗学や宗教史学においては、氏や家の創始者を祖先祭祀の対象としたり、政治的・宗教的な偉人を崇拜対象とする人神信仰の観念や習俗について、多くの研究がなされてきた。しかし、それらは基本的に前近代の民俗一宗教現象として理解され、近代以降そのような信仰は希薄化し、消失していくものであることが前提されていた。それにたいして本研究は、それら慰霊・追悼、あるいは顕彰の行為が、従来の民俗一宗教的な性格とは異なって、近代に即応した世俗的・政治的な性格を新たに獲得することにより、独自の意味と機能を発揮してきた歴史に注目する。

そのさい、分析の中心として設定されるのが、一つは、明治以降の国家イデオロギーたる国民道徳論・家族国家論における祖先崇拜のナショナルな意味づけとの関連であり、一方は、それと対応しつつ形成されていった、各地方における住民の家・郷土にたいする帰属感情と歴史意識の性格についてである。前者においては、柳田国男が『祖先の話』で強調した日本に固有の祖霊信仰の歴史的・政治的特質が、穂積陳重らの家族国家論、井上哲次郎らの国民道徳論との対比において解明される。また、後者における考察では特徴的に、対象が岩船郡を中心とした新潟県下の事例に絞り込まれ、当該地域における郷土意識と歴史観の形成過程をとおして、近代日本社会が個（人）をどのようにまなざし、そこにどのような歴史意識を生み出していったのかが詳細に検討される。

まず冒頭の「序」と「第 1 章」で、本研究の関心の所在と研究方法が提示され、家族国家論と祖先崇拜の重視を推奨する国民道徳論における祖先観が、柳田国男の固有信仰論における祖先観と比較対照して検討される。とりわけ前者において、家や村の祖先ではなく、国民全体が共有しうるものとしての「国民的祖先」の概念が創出されていく過程が、学校教育での家や地域に即した歴史意識の醸成という場面をとおして明らかにされる。

「第 1 部」では、新潟県岩船郡の事例に即し、郷土住民のアイデンティティ形成にとって、旧藩時代の藩主や資料的に判然としない歴史上の特定の人物が郷土の歴史を代表する英雄として造形され、彼らを顕彰するための祭礼やそこの歌と踊りの創出を通じて地域独自の歴史意識や統合感情が形成されていく状況が、綿密に検討される。

「第 2 部」では、靖国神社における戦死者の慰霊行為とは異質な意味と役割をになっていた、出身部隊における戦死者の慰霊祭や市町村単位で催される公葬の問題、さらには地域の習慣に沿った葬送儀礼のありかたがとりあげられ

る。具体的には満州事変当初の新潟市における公葬の実態が、地元紙『新潟新聞』の詳細な分析によって追跡され、そこで個々の戦死者が、「軍国の父」「軍国の母」など遺族に付される定型的イメージとの相乗効果のもとで、誉れある「よき兵士」としていかに形象化されていったかが分析される。

「第3部」では、新潟県内での「家の盛衰」にまつわる異人殺しのフォークロアや集落の開基伝承に関連した巫女の託宣行為などを分析するなかで、それらが家の歴史の形成や偉業をなした祖先の顕彰という本研究のテーマに接続させて考察される。

「結語」では、国民道徳論における祖先観が国家への貢献を指標にして個性をもった祖先を重視する傾向にあったのにたいし、柳田国男が固有名をもった祖先を顕彰することに否定的であったことなどに注目し、祖先祭祀研究の総括と展望を試みる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、これまで民俗学・宗教学・歴史学などの諸研究がとりあつかってきた日本における死者祭祀とそれにかかわる慰霊・追悼・顕彰の行為を、特定の研究方法に限定するのではなく、いわば学際的な方法と関心にしたがって展開した意欲的かつ刺激的な研究成果である。とりわけここでは、前近代日本において強力な民俗-宗教的磁場を形成していた祖先祭祀をめぐる儀礼と観念とが、国民国家成立後のナショナリズムに見合う国民感情や郷土意識の形成のなかでどのような展開を見せていったかが解明される。

また研究方法において、ケーススタディの対象とされた新潟県各地の地方誌などの刊行物、『新潟新聞』をはじめとする各種の地元メディア資料、さらには現地での聞き取り調査で得られた採集資料等々が積極的に利用され、また各分野からの膨大な先行研究をひろく参照して、本研究の問題設定と立論の根拠を客観的・総合的なものになっている。

これまで、近代日本における死者祭祀とナショナリズムの関連という点で最大のテーマは、靖国神社における戦死者の英霊化の問題であった。本研究は、それらの研究史を十分に踏まえながら、それをあえて新潟県という一地方における「近代の経験」の問題として焦点化し、そのなかから、「ふるさと」や「郷土」にまつわる観念の形成とナショナルなイデオロギー形成との照応関係を探ろうとするものである。

本研究によって、これまで二次的・周辺的な領域に貶められてきた地方史研究や郷土史研究の意義が新たに見直されて、方法的にも主題的にもそこに積極的な可能性が見出されたことは特筆すべきである。とりわけ、「郷土」の成立をクニやムラの間中に位置する「郡」に即して考察した点は、きわめて意義深いものと言える。その成果は、各章の叙述のスタイルや関心の方向性において若干の揺れが見られるという弱点を補って余りあるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。